

# 熊本から全国へ、 女子高生の声で社会に新風！ 「私たちが変える、 私たちの未来」



「女子高生サミットin熊本」実行委員・熊本信愛女学院高等学校普通科特進コース2年の(写真左上から)田上愛子さん、米倉双葉さん、那須茅華さん、(写真左下から)田上花ノ子さん、田上桜さん

「やろうと思ったことに期限を決めて手帳に書き込む」「チャレンジしたいことを声にして伝える」など、人生の先輩としてのアドバイスをもらい、生徒たちがメモする場面も



当日は県内外から約353人が参加。坂東眞理子氏講演会(写真左)準備や、プレゼン、司会、設営、音響など、役割を分担し運営に当たっていました



一昨年発覚した大学医学部入試での女子学生の減点問題を発端に、社会への問題提起と自分たちの未来を議論し、発信したいと立ち上がった熊本信愛女学院高等学校の生徒たち。この熱意に賛同し、自分たちも社会への提言をしたいと全国から5校の女子校が参加し「女子高生サミットin熊本」が11月16日、開催されました。開催までの道のりと当日の様子を取材しました。

## 小児がんの子どもたちを支援する活動で自信

「熊本の女子高生が、女性の社会参画を目指し、熊本でサミットを開催するらしい」。地元熊本でこの話が飛び交うようになったのは、昨年春でした。サミット開催に向け動き出したのは、熊本信愛女学院高等学校。原動力となつたのは、一昨年小児がんの子どもたちを支援する「レモネードスタンド活動」に取り組んだことでした。

特進コース全員で活動資金集めに地元企業を回り、「どうにか夏休みにレモネードスタンドの実施にこぎつけました」と田上花ノ子さんは振り返ります。

この活動と時を同じくして社会に大きな波紋を投げかけたのが、医学部の入試選考での女子学生減点問題。「今の時代、しかも教育現場でこのような差別が行われていたことに愕然としました。医学部をめざす友達の前を走っていたクラス仲間から、「おかしいよね」という声が自然と沸き起こりました」と田上愛子さんは唇をかみしめます。

また国内留学で名古屋の高校に通つた際に、都市と地方における教育の質や意識の差を感じたという生徒たち

「自分たちに芽生えた疑問や社会的な課題をそのままにせず、同世代の人と議論し、その思いを発信したい」と学校に相談しサミットを企画しました。

## 資金集め、広報、企画構成、設備準備などに奔走

一番苦労したのは資金集め。学業の合間に飲食店や企業に広告依頼に回る日々でした。中には、「私たちがやっても社会を動かせなかったのに、高校生のあなたたちにできるはずがない」と門前払いされたところもあったそう。しかし、レモネードスタンド活動の実績が後押しし、「私たちがならきつとできると」という自信のほうが大きかったと、田上花ノ子さんは語ります。実働約半年で、サミットの開催日を迎えました。

サミットでは、信愛女学院の山田和徳校長が、「今の社会の矛盾を一人一人が受け止め、どうあるべきかを考える機会にしてほしい」とあいさつ。そして米倉双葉さんが、「私たちは女性だからという理由で、特別に扱ってほしいわけではありません。一人一人が同じステージで輝ける社会にするために、このサミットが明るい未来への一歩となるよう、皆で行動していきましょう」と続けました。

## デイズニープリンセスに見る女性像の変化を发表

各校がそれぞれのテーマを掲げる中、信愛女学院は、「ジェンダー形成と教育」について発表しました。教育面で男女間の大きな差があった1950年代から同等の教育環境が整った現代まで、男女雇用機会均等法などの社会制度や男女の進学率の変化とともに紹介。またデイズニープリンセスも50年代の「おしとやかな女性」から「リーダーシップを持った女性」へ、描かれ方が変わってきたという見解を述べました。

一方、県内外の高校生を対象にした理想のプリンセスについてのアンケートでは、「やさしい、おしとやかなヒロインに好印象を抱く高校生が多いことが分かりました。それは「女子は、女の子らしくあるべき」といった幼少期の刷り込みが関係していると仮定し、幼い頃から性別にとられず個性に合った教育をすべきというメッセージを投げかけました。

他の参加校も、「働く女性と家庭」「広告から見る女性差別」など、高校生とは思えぬ歯切れの良さで、現代の社会の在り方に切り込み、それぞれの課題、また自分たちなりの解決策を訴えました。

## 小さな一歩が、社会を動かす力に

第2部では、昭和女子大学理事長の

坂東眞理子さんによる基調講演「聖く、明るく、美しく、そして賢く」があり、女子高生たちに、「能力や自分の適性を発揮することだけに止まらず、自己実現の先にある社会のために力を生かしてほしい」と語りかけました。

第3部では、5校の代表者と蒲島郁夫熊本県知事、タレントのサザンヌさん、医師の秋月美和さん、ミュージシャンの藤井有貴子さんとのパネルトークが行われました。「チャレンジを続けるコツは？」との質問に、蒲島知事は「みなさんの可能性は無限大。夢を持って一歩を踏み出し、その後は120%の力を発揮し頑張ってください」とエールを送りました。最後は、「女子高生サミットin熊本」提言を高らかに宣言し、閉会しました。

今回のサミットを通し、「自分の将来に迷いはない」と即答した他校生に刺激を受けたと田上愛子さん。「まだまだ小さなスタートですが、この経験を学校生活に生かし、小さな疑問もそのままにせず、自ら行動を起こしていきたい」と力強く語る田上花ノ子さん。

熊本から全国へ向け発信された女子高生の声。これは、これからの社会の基盤を作る大人へのメッセージでもあります。自分たちの未来を自分たちで切り拓いていこうという、彼女たちの熱い思いが、これからの社会を大きく、着実に動かしていこうです。

### 女子高生サミットin熊本提言

- ①それぞれの「自分らしさ」を大切にし、互いに認め合うことのできる人を目指します。
- ②「自分らしさ」を積極的に表現し、より良い在り方へと高めていくことのできる人を目指します。
- ③社会の中に存在する不合理に対しては、仲間とともに手を取り合い、考え行動を起こすことのできる人を目指します。
- ④「持続可能な社会の実現」に向けて、グローバルな視点を持ち、社会に貢献できる人材となることを目指します。



「女子高生サミットin熊本」に参加した兵庫県の賢明女子学院高等学校、三重県のセントヨゼフ女子学園高等学校、愛知県の南山高等学校、東京都の鷗友学園女子高等学校の生徒と



サミット開催のために、街頭で協賛の呼びかけやアンケートを実施



さまざまな世代の人にジェンダー形成についてのヒアリングを行い、考察を深めました



企業への協賛依頼などで実績を積んだレモネードスタンド活動